

クロアチアと近隣諸国の学校教科書における戦争記念碑

War Memorials in the School Textbooks of Croatia and Its Neighboring Countries

石田 信一
ISHIDA Shinichi

要旨

クロアチアの事例を中心に、旧ユーゴスラヴィア諸国の社会主義期の教科書・教材と現在の教科書・教材において「人民解放闘争」と呼ばれた第二次世界大戦に関連する記念碑や関連施設がどのように取り上げられているのかを比較・分析し、学校教育における戦争記念碑の位置づけの変化とその意義について考察した。社会主義期の教科書・教材では共産党政権の成り立ちと直結する「人民解放闘争」に関連する記念碑や関連施設が数多く取り上げられていたのに対して、現在の教科書・教材ではヤセノヴァツ強制収容所跡に建てられた慰霊碑「石の花」を除けばほとんど取り上げられず、とくにクロアチアでは一九九〇年代の独立戦争、いわゆる「祖国戦争」に関連する記念碑や関連施設が重視されていることが明らか

になった。また、二〇一九年に導入されたクロアチアの新たなカリキュラムでは、歴史教科書に「記憶の文化」に関する解説が盛り込まれ、戦争記念碑についても、単なる図版として提示されるだけでなく、より体系的にその来歴や意義を学ぶことが試みられていることを指摘した。

はじめに

クロアチアをはじめとする旧ユーゴスラヴィア諸国（かつてユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国を構成していた国々）には第二次世界大戦にまつわる数多くの戦争記念碑（もしくは慰霊碑）が建てられていたことが知られている¹。社会主義体制下にあつて、これらは共産党が組織

したバルチザンによる抵抗運動としての「人民解放闘争」あるいは共産党（のちに共産主義者同盟と改称）が権力を奪取していく「社会主義革命」と結びつけられ、初等・中等学校の生徒にとつては、教科としての「社会」や「歴史」の教科書・教材だけでなく、学校行事としての遠足やピオニール、いわゆる共産主義少年団の諸活動でも触れる機会が多く、一定のイメージが共有されていたと考えられる。

しかし、一九九〇年代初頭に共産主義者同盟による一党独裁体制の崩壊と連邦国家そのものの解体によつて、これらの記念碑が持つ意味は大きく変わった。ユーゴスラヴィアから分離・独立した新生国家にとつて、社会主義期のユーゴスラヴィアと関連づけられる記念碑は否定的にとらえられることさえあり、放棄され破壊されたものも少なくない。後述するように、「社会」や「歴史」の教科書・教材からこうした戦争記念碑に関する記述や写真がほとんど消え去り、その代わりに「祖国戦争」に関する詳しい記述や写真が掲載されているのが実情である。

興味深いことに、クロアチアで二〇一九年に導入された新しいカリキュラムでは、とくにギムナジウム四年生の「歴史」において「記憶の文化」という内容が含まれており³、実際の教科書には、アプローチは異なるものの、戦争記念碑などについてまとめた解説と数多く写真が掲載されている。本稿では、クロアチアの事例を中心に、社会主義期の教科書・教材と現在の教科書・教材において戦争記念碑がどのように取り上げられているのかを比較・分析していく⁴。最初に小学校三～四年生で学ぶ「自然と社会」の中の郷土学習における戦争記念碑の取り上げ

方を、続いてギムナジウム四年生で学ぶ「歴史」（現代史）における「記憶の文化」に関する解説と戦争記念碑の取り上げ方を検証する。学校教育の問題とは別に、旧ユーゴスラヴィア諸国では「記憶の文化」あるいは「記憶の政治」に関する共同研究が国際的な枠組みで進められており⁵、日本でもすぐれた研究成果があらわれつつある⁶。近年ではドナルド・ニービルの『スポメニック』をはじめとする戦争記念碑の画像データベースともいえる写真集ないしガイドブックが数種類刊行されていることから⁷、この問題への関心が高まっていることが窺える。他の旧ユーゴスラヴィア諸国の事例も参照しながら、教科書・教材に登場する戦争記念碑が持つ意味を考察したい。

一・戦争記念碑と記念館の変遷

社会主義期のユーゴスラヴィアでは、第二次世界大戦は共産党が組織したバルチザンによる抵抗運動としての「人民解放闘争」あるいは「人民解放戦争」とほぼ同一視され、ドイツ軍やイタリア軍など侵略・占領軍に対する蜂起や戦闘を記念したり、住民虐殺事件を追悼する慰霊碑として建てられた戦争記念碑は、同時に「社会主義革命」の記念碑とみなされていた。こうした記念碑や記念銘板はすでに終戦直後から設置が始まっており、首都ザグレブに限っても、一九五〇年代末までに少なくとも一六八か所に存在したことが確認できる⁸。また、ユーゴスラヴィア全土で記念碑や記念銘板だけでなく、革命博物館や「人民解放戦争」博

物館、それらをあわせた複合施設が設けられていった。⁹ もっとも、現在でも観光名所になっている抽象的・象徴的なデザイン的巨大な記念碑が制作されるようになったのは主として一九六〇年代から七〇年代にかけてのことであった。ニービルによれば、「スポメニツクの大多数は、かつての戦場や革命蜂起が起こった場所に置かれている。ユーゴスラヴィア政府は、こうして都会から離れた場所に政治的な史跡を戦略配置することが、増大する都市住民と国の歴史をつなぐと考えた。このつながりが、社会主義闘争を経験していないユーゴスラヴィアの若者を、その物語に結びつけるきっかけになることが期待された」という。社会主義リアリズムの影響が強かった初期の作品とは異なり、この時期の記念碑の制作にはドウシヤン・ジャモニヤ、ヴォイン・バキッチ、ミオドラグ・ジヴコヴィチ、ボグダン・ボグダノヴィチなどユーゴスラヴィアを代表する彫刻家や建築家が積極的に関与し、芸術的価値が高いとされる作品が生み出された。これらの記念碑は社会主義期の旅行ガイドブックにたびたび登場し、個々の、あるいは地域の記念碑や記念館に関するモノグラフやそれらを巡る『ユーゴスラヴィア革命記念碑』の道路地図まで刊行されていた¹⁰。前述の通り、子どもたちにとっても、こうした記念碑や記念館を訪れることは重要な行事の一つであった。ニービルによれば、ユーゴスラヴィア・ピオニール連盟にとって欠かせないのが「子どもたち大勢を国の記念施設に連れていくこと」であり、「ツァーは国の公式な歴史解説を伝える方法であり、ピオニールの愛国教育の最重要部分となっていた」という¹¹。

しかし、一九九〇年に共産主義者同盟による一党独裁体制が崩壊してユーゴスラヴィアが社会主義国家ではなくなったことに加え、一九九一年から九二年にかけて激しい「内戦」（あるいは各共和国にとっての独立戦争）を経て連邦解体が進行したため、「人民解放闘争」によって第二の建国を果たしたユーゴスラヴィアを象徴する存在であった記念碑は無視され放棄されたり、意図的に破壊・撤去されるようになった。とくに一九九一年から九五年まで「祖国戦争」（独立戦争）の渦中にあったクロアチアでは、第二次世界大戦に関連する約六〇〇〇の記念碑（記念銘板や銅像を含む）のうち半数近い約二九〇〇もの記念碑が破壊・撤去されたという¹²。ポジェガル・スラヴォニア県のカメンスカにあった「スラヴォニア人民勝利記念碑」がその代表例といえるが、リカ・セニ県のスルブにあった「クロアチア人民蜂起記念碑」¹³のように、いったん破壊・撤去されたものの復元されたケースも少なくない。セルビア人、クロアチア人、ムスリム人（現在のボシュニャク人）による三つ巴の「内戦」が起こったボスニア・ヘルツェゴヴィナでも記念碑の破壊・撤去が見られたが、二〇〇一年に文化遺産全般を対象とするモニユメントの保存委員会が設置され、その保護がはかられている。

また、クロアチアに限らず、社会主義期のユーゴスラヴィアでは全国に設置されていた革命博物館は、一九九〇年頃からそのほとんどが各国の歴史博物館に統合されるなどして消滅している。クロアチアの場合はザグレブにあった革命博物館は国立歴史博物館と統合してクロアチア歴史博物館となり¹⁴、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの場合はサライエヴォ

にあった革命博物館が歴史博物館に、またスロヴェニアの場合はリュブリャナにあった人民革命博物館が現代史博物館に再編された¹⁵⁾。さらに、クロアチアの場合、それまでの記念碑や記念館に置き換わるように、各地に「祖国戦争」に関する記念碑・慰霊碑や記念館が新設され、世界的に知られる激戦地ヴコヴァルだけでも非常に多くの「記憶の場所」が設けられている¹⁶⁾。

こうした記念碑や記念館の位置づけの変化は学校教育にも反映されており、各国の教科書・教材において、これまでとは違う形で記念碑・慰霊碑や記念館が紹介されている。続いて、これらを検証していくことにする。

二. 社会主義期の郷土学習の副読本と記念碑

旧ユーゴスラヴィア諸国は連邦時代においても各共和国・自治州で独自の教科書・教材を刊行しており、内容的にも統一したものではなかった。とはいえ、小学校一年生から四年生向けの科目である「自然と社会」には郷土学習の内容が含まれており、そこで「人民解放闘争」に関連する記念碑や記念館も少なからず登場した。小学校五年生から八年生で学ぶ「歴史」のうち、とくに小学校八年生向けの内容は基本的に現代史となっており、そこでもまた「人民解放闘争」が非常に詳しく取り上げられ、それに関連する記念碑や記念館の写真が掲載されていた¹⁷⁾。セルビアの場合、中学校向けの歴史教科書の表紙をコスマイの記念碑（慰霊碑）

が飾ることもあった【図版1】¹⁸⁾。なお、ユーゴスラヴィア時代、義務教育である小学校（基礎学校）は八年制、義務教育ではない中学校（ギムナジウムと職業専門学校に大別されるが、職業教育を重視した制度に一元化されていた時期もある）は三〜四年制であった。現在でも、クロアチアとセルビアはこの制度を基本的に引き継いでいる（それ以外の旧ユーゴスラヴィア諸国では小学校は九年制に移行している）。

一九八五年にクロアチアのシュコルスカ・クニガ社が刊行した小学校

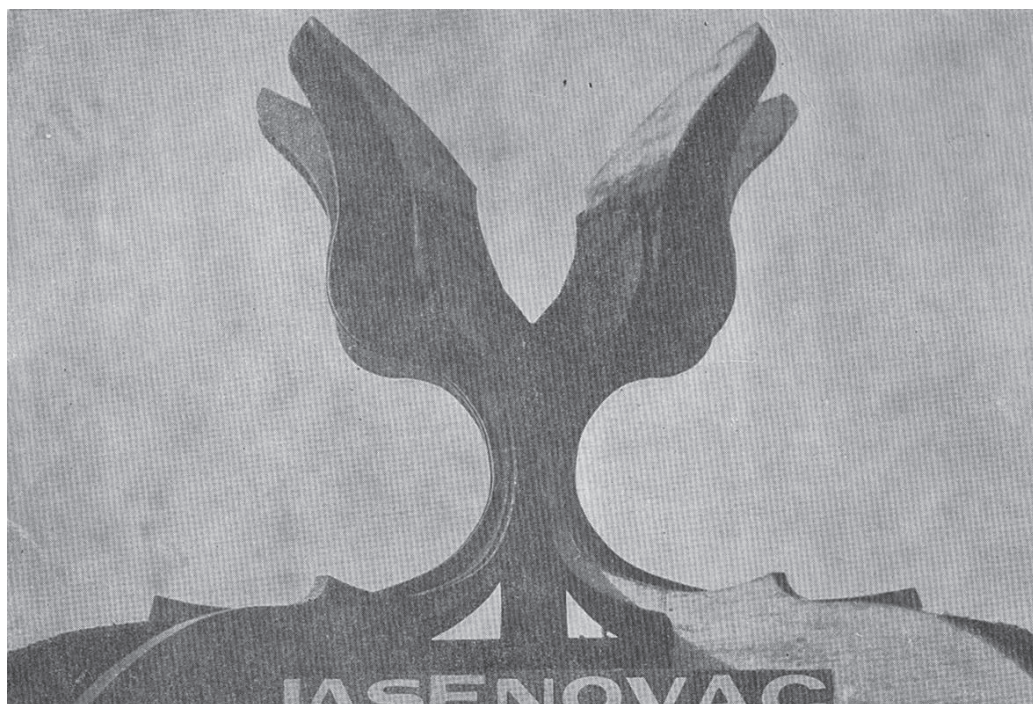


図版1. コスマイの記念碑（教科書の表紙）

三〜四年生向けの『自然と社会アトラス』には、共産党指導者として「人民解放闘争」を指揮し、ユーゴスラヴィアを社会主義連邦国家として再建して終身大統領となったヨシブ・プロズ・ティトー（一九八二〜一九八〇年）の写真一七点（うち一点はティトーが乗船した「ガレブ」号）

に加えて、ユーゴスラヴィア各地の歴史文化遺産の写真一八点と、同じくユーゴスラヴィア各地の革命・人民解放闘争記念碑の写真一八点が掲載されていた。革命・人民解放闘争記念碑に関しては、「自由のために亡くなった戦士たちに敬意を払って、私たちの諸民族は全国に数多くの革命・人民解放闘争記念碑を建てた。それらは私たちにファシストの征服者に対する厳しい闘争の日々と同志ティトー元帥指揮下の私たちの人民解放軍の勝利を思い起こさせる」¹⁹との説明がある。その内訳は次の通りである（呼称は教材に記載されているものであり、現在の一般的な名称とは一致しないものもある）。

①クムロヴェツ（クロアチア）の「ティトーの生家」、②クムロヴェツのティトー像、③ヤブラニツァ（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）のネレトヴァ川に架かる橋の残骸、④ポドガリチ（クロアチア）の「モスラヴィナ人民革命記念碑」、⑤ザグレブのドルシユチナにある「ファシズムの犠牲者の慰霊碑」、⑥ボドゴラ（クロアチア）の「ユーゴスラヴィア海軍創設記念碑」、⑦コザラ（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）の「コザラ人民の闘争と抵抗の記念碑」、⑧スルプ（クロアチア）の「クロアチア人民蜂起記念碑」、⑨ノヴスカ（クロアチア）近郊ヤセノヴァツの「ファシストのテロルと犯罪の犠牲者の慰霊碑」【図版2】²⁰、⑩コチエヴィエ（スロヴェニア）の「自由の記念碑」、⑪コスマイ（セルビア）の「コスマイ人民解放運動部隊の戦士の記念碑」、⑫ルド（モンテネグロ）の「第一プロレタリア旅団結成記念碑」、⑬ティエンティシユテ（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）の「ステイエスカの戦いの記念碑」、⑭ダニロヴグ



図版2. ヤセノヴァツの「石の花」（パンフレット）

ラド（モンテネグロ）近郊ラジネの「処刑された青年の慰霊碑」、⑮スコピエ（マケドニア）の「小さな戦士の記念碑」、⑯ノヴィ・サド（ヴォイヴォディナ）の「ファシズムの犠牲者の慰霊碑」、⑰ジャコヴィツァ（コソヴォ）の「友愛と統一の記念碑」、⑱クラグイエヴァツ（セルビア）の「処刑された学生の慰霊碑」。

なお、同時期にセルビアの教科書・教材局が刊行した『私の最初のアトラス』には、ティトの写真やユーゴスラヴィア各地の革命・人民解放闘争記念碑の写真は全く掲載されていないが、「ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国の交通と観光」という地図に「人民解放運動の記念碑」としてティトの生家、ヤセノヴァツ、コザラ、コスマイ、ティエンティシュテ、クラグイエヴァツの記念碑（前述の①⑦⑪⑬⑱）に加え、ヴァリエヴォ（セルビア）のステイェバン（ステヴァ）・フィリポヴィチの銅像（正式名称は「革命戦士の記念碑」）²¹とティト・ドルヴァル（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）の「ティトの洞窟司令部」のイラスト（アイコン）²²が掲載されている。なお、同じくセルビアの教科書・教材局が刊行した小学校四年生向け社会科学教科書には、コザラ、ティエンティシュテ、クラグイエヴァツ、ティト・ドルヴァルのものが掲載されているほか、セルビア各地の「人民解放闘争」関連施設、例えばベオグラードの七月四日博物館、ストリツェ博物館、ウジツェ近郊にあるカディニャチャの記念施設などが掲載されている²³。この教科書にはティトに関する記述や写真が数多く掲載され、ベオグラードにあるティト廟（「花の館」と呼ばれる）も紹介されている²⁴。

前述の通り、社会主義期から現在に至るまで、クロアチアでは小学校三～四年生向けの「自然と社会」に郷土学習の内容が盛り込まれ²⁵、教科書とは別に地方ごとの副読本が用意されてきた。社会主義期には三年生で「博物館、文化・歴史記念碑の訪問や自然の美しさや重要な社会主義建設の実物の紹介」を目的とする遠足を行うことが推奨されていた²⁶。

社会主義期の副読本にはそれぞれの地方（基本的に自治体連合の範囲）における労働運動と共産党の活動の歴史、第二次世界大戦中の「人民解放闘争」と郷土の「人民英雄」の紹介、ティトと郷土との関わりなどに関する非常に詳しい記述があり、それとあわせて各地の記念碑や関連施設を知る機会にもなっていた。すべてを網羅するのは困難であるため、ここでは三冊の副読本の事例を取り上げる。

①『ザグレブと近隣地方』の副読本には、ザグレブの革命博物館の展示ほか、ザグレブ市内にある「一二月の犠牲者」や「人質の処刑」の慰霊碑、ミロゴイ墓地、ドトルシユチナ、オボロヴォの記念碑、サモボル郊外アニンドルのクロアチア共産党創設記念碑、ヤストレバルスコの記念墓地などが掲載されている²⁷。ザグレブは枢軸国側の傀儡国家「クロアチア独立国」の首都でもあったが、それゆえに激しい抵抗運動を繰り広げたことでも知られ、この副読本の冒頭では「ザグレブ―英雄都市」として紹介されている²⁸。ザグレブで戦後まもなく「人民解放闘争」に関する記念碑が数多く制作されたことは、すでに述べた通りである²⁹。

②『リエカ、イストリア、クヴァルネル、ゴルスキ・コタル地方』の副読本には、リエカの解放記念碑のほか、プラタク、マティチ・ポ

リヤナ、ロヴィニ、ポドフムの記念碑・慰霊碑、強制収容所であったラ
ブ島カンボルの記念墓地、ブラシュキの記念館、リエウカやマルティン
シュチツアの記念銘板などが掲載されている³⁰。同地方に関しては、「自
然と社会」のための副読本ではないが、別途『人民解放闘争と社会主義
革命』の郷土史読本も存在し、ポドフムの記念碑（表紙）をはじめとす
る数多くの記念碑や関連施設が掲載されている³¹。

（3）『ヴコヴァル、ヴィンコヴツィ、ジュパニャ』の副読本には、ユー
gosラヴィア共産党第二回大会が開催されたヴコヴァルの労働者会館や
ドゥディク記念公園、ヴコヴァル、ヴィンコヴツィ、ジュパニャにある
記念碑や銅像、「人民解放闘争」関連施設が掲載されている³²。同時期に、
ヴコヴァルにある「革命的労働運動」と「人民解放運動」の記念碑を紹
介する非常に詳しいガイドブックも刊行されている³³。このガイドブッ
クの表紙にはボグダノヴィチが設計した「クロアチア独立国」による犠
牲者を悼む円錐形の慰霊碑が特徴的なドゥディク記念公園が掲載されて
いるが、この記念公園は優れた建築プロジェクトに与えられるピラネー
ジ賞の初代受賞作品としても知られるようになった³⁴。もともと、後述
するように、ヴコヴァルと戦争記念碑との関わりは、一九九〇年代以降、
大きく変化することになる。

三、現在の郷土学習の副読本と記念碑

一九九〇年にクロアチアで非共産党系の新政権が誕生してから、ある

いは一九九一年から九二年にかけてクロアチアがユーgosラヴィアから
分離独立してからも、小学校の「自然と社会」における郷土教育自体の
大枠は維持された。しかし、各々の「郷土」の範囲は大きく変わるこ
ともあった。クロアチアの地方自治制度が一九九〇年代にオブチナ（コ
ミューンとも訳される）のみの一元的な制度から広域自治体として県
（ジュパニャ）、基礎自治体としてオブチナと市を置く制度に刷新され、
各地で自治体間の境界の変更が相次いだからである³⁵。『ザグレブと近隣
地方』に含まれる地域はザグレブ市とザグレブ県に、「リエウカ、イス
トリア、クヴァルネル、ゴルスキ・コタル地方」に含まれる地域はプリ
モリエールゴルスキ・コタル県とイストリア県に分かれたが、『ヴコヴァル、
ヴィンコヴツィ、ジュパニャ』に含まれる地域はヴコヴァル・スリエ
ム県とほぼ重なっている。

現在、各県の副読本が用意されているが、ここでは、労働運動と共産
党の活動の歴史、第二次世界大戦中の「人民解放闘争」と郷土の「人民
英雄」の紹介、ティトーと郷土との関わりといったテーマ自体が抹消さ
れており、上記の記念碑や銅像のほとんどが掲載されていない。

（1）ザグレブはザグレブ市（県と同格）とザグレブ県に分かれており、
それぞれの副読本が刊行されている。このうち『ザグレブ市』の副読本
には近現代の戦争記念碑は全く登場しない。一九五〇年代から六〇年代
にかけてザグレブ市長をつとめ、戦後復興に貢献したヴェチエスラヴ・
ホリエヴァツの銅像が掲載されているものの、彼がクロアチア共産党員
として「人民解放闘争」に参加し、「人民英雄」に叙勲されたことなど

には触れられていない³⁶。プロフィル社の副読本の場合、ホリエヴァツの銅像を含めて、近現代の戦争記念碑は「人民解放闘争」であれ「祖国戦争」であれ全く登場しない³⁷。

(2)『プリモリエールゴルスキ・コタル県』の副読本にはポドフムの記念碑だけが「第二次世界大戦の犠牲者の慰霊碑」として紹介され³⁸、『イストリア県』の副読本にはパジンの統一記念館（一九四三年にイストリア人民解放委員会がイストリアと母国クロアチアの統一を宣言したことを記念する施設）だけが関連施設として登場する³⁹。

(3)『ヴコヴァル・スリエム県』に関しては、シュコルスカ・クニガ社の副読本は現在刊行されていないものの、アルファ社とプロフィル社から副読本が刊行されている。セルビアとドナウ川を挟んで向かい合うヴコヴァルは、クロアチアが公式に「大セルビア的侵略」に対する「正当な防衛・解放戦争」⁴⁰として位置づける一九九〇年代の「祖国戦争」のシンボルとなった都市でもあって、戦争記念碑との関わりも大きく変化した。それは現在でも続いており、木戸泉によれば、「紛争終結から二〇年以上が経過した現在、クロアチア国内では紛争の記憶を強固にし、さらに次世代へ継承しようとする動きが見られる。特に激戦地となった都市ヴコヴァルでは、クロアチア系住民の紛争の記憶を強化し継承する行事の開催やモニュメントの設立が積極的に行われている」⁴¹という。実際、アルファ社の副読本には「クロアチアが独立すると、セルビアのヴコヴァルおよびクロアチアへの公然たる侵略が始まった。セルビアの砲撃により、都市は完全に破壊された。多くの甚大な被害を受けた建物

の中には、エルツ宮殿や中心市街地のバロック建築、フランシスコ会修道院などがある」という説明とともに、有名な給水塔をはじめとする建築物や市街地の写真が、また「この都市は祖国戦争のすべての犠牲者のために慰霊碑が建てられたヴコヴァルの犠牲者の墓地で知られる。白い十字架が自由と祖国と歴史がいかに価値があるかを私たちに伝えてくれる」という説明とともに、記念墓地とその中央に立つ記念碑「空の十字架」と「永遠の炎」、ドナウ川沿いの巨大な「白い十字架」などの写真が掲載されている⁴²。一方、プロフィル社の副読本も「墓地には九三八本の白い十字架が立っている。その場所に第二次世界大戦後のヨーロッパで最大規模の集団墓地がつくられ、そこで九三八体の遺体が発見された。墓地の中央には二〇〇〇年八月五日にジュルジャ・オストヤ作の記念碑が建てられた。記念碑は青銅製で高さは四メートルもあり、その中心に「空の十字架」と「永遠の炎」がある」という説明とともに記念墓地の全景の写真を掲載しているほか、「祖国戦争」におけるヴコヴァル包囲戦に関する記述も詳しい⁴³。

なお、シュコルスカ・クニガ社の小学校三、四年生向けの「自然と社会」の教科書からも第二次世界大戦に関する記念碑・記念館は一掃され、「祖国戦争」に関するもの（シユカブルニャの記念碑やヴコヴァルの博物館）だけが登場する⁴⁴。ただし、かつての社会主義期の副読本における「人民解放闘争」に関する記述に比べれば、「祖国戦争」に関する記述は必ずしも多くはない（一〜二頁程度）。一方、同じシュコルスカ・クニガ社の小学校八年生向けの歴史教科書では、第二次世界大戦に関する

る記述は依然として詳しく（四四頁）、「祖国戦争」に關してもかなりの分量を割いているものの（三四頁）、どちらの場合も記念碑や記念館はごく一部しか登場しない（ヴコヴァルの給水塔など）⁴⁵。もともと、アルカ・スクリプト社の小学校八年生向けの歴史教科書では、ヤセノヴァツの「石の花」、シサクやティエンティシユテのバルチザン記念碑、ヴィス島の「ティトーの洞窟司令部」などを含む第二次世界大戦に關する記念碑や記念館が数多く登場しており⁴⁶、教科書によって大きな違いがあることも事実である。

四、ギムナジウムの歴史教科書における「記憶の文化」

クロアチアでは、二〇一九年から導入されている新たなカリキュラムに対応して、ギムナジウム四年生向けの教科書に「記憶の文化」が登場する。これは新しい試みであるが、各教科書がどのように「記憶の文化」について説明するかについては、現時点では大きな差異が見られる。

（一）アルファ社の教科書

アルファ社の教科書は五頁を割いて「二〇・二一世紀の歴史と記憶の文化、文化遺産の保護機関の役割」（第一八章）を設けており⁴⁷、「クロアチア考古学モニュメント博物館」、「クロアチア人のキリスト教の二三〇〇年」、「第一次世界大戦の記憶」、「第二次世界大戦の記憶」、「祖国戦争の記憶」、「ジェノサイドのコメモレーション」、「クロアチア学校

博物館」、「ズリンスキとフランコパン」といった見出しが掲げられている。「第二次世界大戦の記憶」については、次のように説明されている（抜粋）。

ユーゴスラヴィアの共産主義政権は第二次世界大戦を正統性の源泉として取り扱い、墓地の複合施設や記念碑の建設、専門博物館の開設、映画の撮影、文学作品の推奨などによって、戦争のあらゆる面を集中的に取り扱い、勝者の側面を描いた。同時に、敗者の側の記憶は禁じられ、戦争墓地は耕され、博物館は英米空軍が行ったクロアチアの諸都市への大規模な爆撃といった出来事を取り上げず、戦争中に撮影された映画は禁止され、戦後の映画や文学作品は一面的で筋書きのある描写を伴うものとなった⁴⁸。

これに比べると、「祖国戦争の記憶」に關する説明は博物館・記念館等の紹介が中心となっているが、「祖国戦争は多くのクロアチア国民にとって直接の経験であり、民主的クロアチア国家の存立の問題が決定された戦争であることから、この戦争のコメモレーションの政策は最も包括的なものとなっている」⁴⁹といった記述も見られる。この章には一〇点の図版が掲載されているが、戦争記念碑・記念館としては、①ザグレブのミロゴイ墓地にある「第一次世界大戦で亡くなったクロアチア人兵士の記念碑」、②ペトロヴァ・ゴラにある「バニヤ・コルドウン人民

蜂起記念碑」③クニンの「一九九五年嵐作戦のクロアチア勝利記念碑」、④イエレヴァン（アルメニア）郊外にある「アルメニア人ジェノサイド記念施設」、⑤エルサレム（イスラエル）の「ヤド・ヴァシエム（ホロコースト記念館）」がある。

同じ教科書では、随所に戦争記念碑が登場する。「世界、ヨーロッパ、クロアチアにおける第二次世界大戦」（第四章）ではヤセノヴァツ強制収容所の写真（一九四二年）とその跡地に建てられた慰霊碑「石の花」の写真のほか、シサク郊外のブレゾヴィツァ記念公園にある最初のパルチザン部隊「第一シサク・パルチザン部隊」の創設の記念碑（ジェリミル・ヤネシユ作で、「古いニレの木」と呼ばれる）の写真が掲載されている。⁵⁰ さらに、「クロアチア、ヨーロッパ、世界における第二次世界大戦中の住民の苦難と人口の変化」（第五章）では、ポーランドのソビボル強制収容所やアウシュヴィツ・ビルケナウ強制収容所の写真などとともに、エルサレムのヤド・ヴァシエムにある彫刻「ヤヌシユ・コルチャックと子どもたち」、ロシアのスモレンスク郊外にあるカティンの森記念施設の記念碑、広島市の平和都市記念碑（原爆死没者慰霊碑）、オーストリアのケルンテン州にある「ブライブルクの悲劇のクロアチア人の犠牲者の慰霊碑」などの写真が掲載されている⁵¹。また、「クロアチア共和国の創設と祖国戦争」（第二章）では「祖国戦争」の犠牲者の慰霊碑、記念館、墓地までもが繰り返し登場する。「二〇・二一世紀の芸術・文化・スポーツ」（第一章）では現代の芸術家が制作したヴコヴァルにおける「祖国戦争」の犠牲者を追悼する十字架を用いた三つの記念碑（慰霊

碑）が詳しく取り上げられている⁵²。

（二）メリディヤニ社の教科書

メリディヤニ社の教科書では、表紙に数点の写真が並べられているが、その中にヴコヴァルの給水塔がある。この教科書は「二〇・二一世紀の歴史と記憶の文化、文化遺産の保護機関の役割」という項目だけで二二頁と、四種類の教科書の中で最も多くの頁を割いている⁵³。「記憶の文化の説明と重要性」、「二〇・二一世紀のヨーロッパ史・世界史の記憶の中心地」、「ホロコーストの記憶」、「クロアチアの記憶の文化」、「文化遺産の保護機関の役割」といった見出しが掲げられ、一三点の図版が掲載されている。冒頭の「記憶の文化の説明と重要性」には次の説明がある（抜粋）。

基本的に記憶の文化は有形無形のシンボルや儀礼を通じた特定のコミュニティの過去の出来事との関わりを表われである。それに何らかの方法で社会が何を記憶すべきかを選択する特定の選択プロセスをつねに伴うことは強調されるべきであろう。二〇世紀の政権は公式の記憶の文化に望ましい、時には唯一許された出来事の解釈を作り上げた。政権あるいは政治体制の転換によって大体は記憶の文化の政策も変化した。こうした方針の中心に政権の安定、支配的イデオロギーの維持、ナショナル・アイデンティティの強化といった問題があるのは珍しいことで

はない⁵⁴⁾。

また、「クロアチアの記憶の文化」には、さらに詳しく、次のような説明がある(ごく一部を抜粋)。

社会主義ユーゴスラヴィアの時代、記憶の文化は反ファシスト闘争、社会主義革命、ヨシブ・ブロズ・ティトーの統合的役割の賛美のしるしであった。それは非常に急速に通じや広場や機関の名称に、そしてパルチザンの抵抗を象徴する大きく建造された新たな記念物や彫刻に反映された。学校は生徒に重要な記念碑とその国家にとっての意味を知らせるための遠足を行った。「中略」一九六〇年代を通じてユーゴスラヴィア各地にパルチザンの戦争の功績と犠牲を記念する一連のモダニストの記念碑の建造が始まった。「中略」同じように、戦争の記憶は建国時から生まれた「パルチザン」映画でも体系的に維持された。「中略」その間ずっと大量のパルチザンの証言や人民英雄に関する作品が出版された⁵⁵⁾。

なお、この項目に掲載されている図版の内訳はポスターが二点、写真が一点で、写真は①ペロヌ(フランス)の第一次世界大戦博物館、②ロンドンのザ・セノタフ(第一次世界大戦後に建てられた戦争記念碑)、③ヴォルゴグラード(ロシア)の「母なる祖国像」(第二次世界大戦中

のスターリングラード攻防戦を記念して建てられた巨像)、④ブダベスのスターリン像(倒壊時のもの)、⑤広島原爆ドーム、⑥ワルシャワ・ゲット・蜂起の記念碑(西ドイツのプラント首相が訪問した際のもの)、⑦ベルリンの「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」、⑧ヤセノヴァツの「石の花」、⑨ザグレブ郊外のメドヴェドグラードにある「祖国の祭壇」(一九九〇年代の「祖国戦争」の犠牲者を追悼する慰霊碑)、⑩ヴコヴァルの給水塔、⑪ザグレブのクロアチア国立文書館となっている。全体に図版のサイズは大きく、例えば「石の花」や「祖国の祭壇」はそれぞれ縦一五センチ・横一八センチもある。これとは別の項目に、「祖国戦争」に関する記念碑や関連施設としてノヴスカトリピクの間にあるトロクト、イヴァノヴォ・セロ、フルヴァツカ・コスタイニツァ(鳩)と呼ばれる)のものが掲載されている⁵⁶⁾。

(三) プロフィル・クレット社の教科書

プロフィール・クレット社の教科書には「歴史と記憶の文化」(第一八章、五頁)⁵⁷⁾という章があり、章の扉にザグレブにある「一二月の犠牲者」の慰霊碑が掲載されている。全体的に短いものの、「記憶の文化」とは何かという問題を含む詳しい説明がある(抜粋)。

記憶の文化は狭義にはトラウマを伴う出来事の記憶と関連し、コメモレーション、受難の地の記念、軍事的勝利の祝賀などを通じて表明される。ドイツでは何よりも第二次世界大戦、とく

にホロコーストの恐怖のメモリーションと学習、クロアチアでは第二次世界大戦とは別に祖国戦争とも関連する。トラウマを伴う過去の出来事や犯罪の記憶にはポジティブな要素もあり、社会として大目に見たり繰り返したりしないという行動様式を明確にすることができる。その一例がドイツとポーランドの代表者によるホロコーストの合同メモリーションであり、年とともに両方の国民に自らの過去と一緒に向き合うことを可能にしてきた⁵⁸。

この文章に続いて、歴史を記憶し理解する上での博物館や文書館の重要性について触れられている。ヤセノヴァツの「石の花」・ベルリンの「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」、オヴチャラ記念館が写真付きで詳しく紹介されており、例えば「石の花」に関しては、「記念地域でもっとも有名なのが一九六六年に建てられたボグダン・ボグダノヴィチの慰霊碑「石の花」である。花は生と再生を、すなわちこの地域の恐ろしさゆえにこそ、憎しみが世代から世代へと持ち越されることのない和解の地にしたいという制作者の願いを象徴している」という説明がある⁵⁹。さらに、この教科書では二〇世紀の出来事に関する「記憶の文化」の探究が課題として提示されており、コバリド、マウトハウゼン強制収容所記念地域、アウシュヴィッツ強制収容所記念地域、ワルシャワ蜂起博物館、ヤセノヴァツ記念地域、ジャコヴォ強制収容所、リエカ郊外の「リバは覚えている」記念館、ドトルシユチナ（ザグレブ）の

「記憶の場所」、ブライブルク、テズノ、ヴコヴァル、トゥラニ（カルロヴァツ）、サライエヴォの子ども戦争博物館が例示されている⁶⁰。

この教科書の別の章「二〇・二一世紀の芸術と文化」（第十七章）においては「モスラヴィナ人民革命記念碑」の写真とともに「ドゥシャン・ジャモニヤのモスラヴィナ人民革命記念碑（一九六七年）はユーゴスラヴィア芸術の一例である。第二次世界大戦の苦難と犠牲者をテーマ化した一連の記念碑の一つである」という説明がある⁶¹。このほか、「祖国戦争」に関する記念碑や関連施設としてオヴチャラの集団墓地と慰霊碑、スラヴォンスキ・プロドの記念碑（慰霊碑）、ヴコヴァルの給水塔や記念墓地などが掲載されている⁶²。

（四）シュコルスカ・クニガ社の教科書

シュコルスカ・クニガ社の教科書では、表紙に十数点の写真がモザイク状に並べられているが、その中にヴコヴァルの給水塔がある。この教科書には「祖国戦争の影響、クロアチア共和国における社会的変化」という章の中に「記憶の文化と過去と向き合うこと」（三頁）⁶³という項目があり、次の説明がある。

人的・物的損失はあらゆる戦争の最も痛ましい結果であり、「祖国戦争」もこれにあてはまる。戦争の犠牲者やその家族にとつて、被った被害の責任を明らかにして加害者を罰することは非常に重要である。残念ながら、多くの場合にそれはなされず、

多数の戦争の犠牲者やその家族、そして社会全体の日常生活にネガティブな影響をもたらす。「中略」重要な人物や事件については学校で学び、政権の代表者が毎年記念行事を行い、記念碑や記念銘板をつくる。「祖国戦争」において独立クロアチアが誕生したため、数多くの記念碑、記念地、博物館、展覧会、ドキュメンタリーや映画が、実際に私たちの歴史の中のこの時期に向けられ、都市においては通りや広場が「祖国戦争」の防衛者や部隊の名称を帯びている。

この文章に続けて、各地の「祖国戦争」関連施設および記念日（八月五日の「勝利と祖国感謝の日」と十一月一日の「祖国戦争の犠牲者を追悼する日」、ヴコヴァルとシユカプルニャの犠牲者を追悼する日」）の紹介があるが、いずれも「祖国戦争」に限定され、しかも「記憶の文化」そのものについての説明は十分になされていないように見える。なお、「記憶の文化と過去と向き合うこと」には、ヴコヴァルの給水塔、カルロヴァツの祖国戦争武器博物館、ザグレブのミロゴイ墓地にある慰霊碑、オヴチャラ記念館など「祖国戦争」に関連する写真が掲載されている。これとは別に、第二次世界大戦に関しては「戦争犯罪、人道に対する罪、ホロコースト」という章に「南京大虐殺」の慰霊碑、カティンの森の事件の犠牲者の慰霊碑、アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所、ヤセノヴァツの慰霊碑「石の花」などの写真が詳しい説明とともに掲載されているほか⁶⁴、「独立したクロアチア共和国の創設」という章ではヴコヴァ

ルの給水塔、ザグレブの国連保護軍司令部前にあった「痛みの壁」（現在はミロゴイ墓地に移転され、ジャモニャによる「クロアチアの犠牲者の声・痛みの壁」という慰霊碑の一部となっている）、ゴルニャ・ストウビツァのルドルフ・ペレシン記念公園⁶⁵、前述の「祖国戦争の影響、クロアチア共和国における社会的変化」という章にプリトヴィツェにあるヨシブ・ヨヴィチ記念碑⁶⁶、シユカプルニャの虐殺の犠牲者の慰霊碑などが取り上げられている⁶⁷。

なお、シユコルスカ・クニガ社は唯一「祖国戦争」に関する小学校・中学校向けの教本（教師向け）を刊行しており（表紙はヴコヴァルの給水塔）、そこでも数多くの記念碑・慰霊碑や記念施設が紹介されている⁶⁸。

5. 他の旧ユーゴスラヴィア諸国と「記憶の文化」

現在まで学校の歴史教科書で「記憶の文化」を独自のテーマとして設定しているのはクロアチアに限られる。しかし、他の旧ユーゴスラヴィア諸国の中には、なお頻繁に戦争記念碑が登場する国々もある。各国の状況を確認しておきたい。

まず、セルビアの場合、一例としてノヴィ・ロゴス社のギムナジウム四年生向け歴史教科書を見ると、第二次世界大戦に関連する記念碑・慰霊碑としてセルビア国内ではクラグイェヴァツ、ヤインツィ、スタロ・サイミシユテ、ノヴィ・サド等のものが、国外ではヤセノヴァツやヤド・

ヴァシエムのもので、詳しい解説とともに紹介されている⁷⁰。また、セルビアではコソヴォ紛争の過程で生じた一九九九年の北大西洋条約機構（NATO）軍による空爆が批判的に取り上げられており、ベオグラードのタシユマイダン公園にある慰霊碑の写真が掲載されている⁷⁰。さらに、ギムナジウム向けではないが、クレット社の小学校八年生向け歴史教科書（表紙にはヤセノヴァツの「石の花」も掲載されている）では、クラグイエヴァツ、コザラ、ティエンティシユテ、カディニヤチャ、ベオグラード、コスマイ、プバニ、シド、レスコヴァツ、ノヴィ・サドのものなど、より多くの記念碑・慰霊碑や記念施設が登場する⁷¹。ホロコーストとの関係で、ベルリンの「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」やエルサレムのヤド・ヴァシエム、ヤセノヴァツの「石の花」などが紹介されている⁷²。クロアチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける一九九〇年代前半の戦争の被害に加えて、一九九九年のNATO軍による空爆の被害や慰霊碑の写真も掲載されている⁷³。他社の小学校八年生向け歴史教科書を見ても、第二次世界大戦に関連する記念碑・慰霊碑が取り上げられる頻度は比較的高いといえる⁷⁴。なお、セルビアではカリキュラムの移行期にあたり、上記のノヴィ・ロゴス社のものを除けばギムナジウム四年生向けの内容は大きく変更されると考えられるが、二〇一〇年代に出版されたものを見る限り、全般的に第二次世界大戦に関連する記念碑・慰霊碑などが登場する頻度は低い⁷⁵。

モンテネグロのギムナジウム四年生向け歴史教科書は一種類のみで、そこにはクラグイエヴァツとヤセノヴァツの慰霊碑のほか、ポドゴリ

ツァ郊外のゴリツァ山にあるバルチザン記念碑、ボスニア内戦中の一九九三年にムスリム難民が殺害されたシュトルプツィ事件の犠牲者の慰霊碑、一九九九年にNATO軍に空爆されたムリオ村の犠牲者の慰霊碑などが掲載されている⁷⁶。同じく小学校八年生向けの歴史教科書も一種類のみで、ここではクラグイエヴァツとヤセノヴァツの慰霊碑だけが取り上げられている⁷⁷。

スロヴェニアのギムナジウム四年生向け歴史教科書は二種類刊行されているが、いずれも戦争記念碑は第二次世界大戦に関連するものを含めてほとんど登場しない⁷⁸。ムラディンスカ・クニガ社の教科書には、一九九五年に起こったボスニア・ヘルツェゴヴィナのスレブレニツァ虐殺記念碑（慰霊碑）や二〇一一に起こったノルウェーのオスロとウトヤ島の連続テロ事件の犠牲者の慰霊碑が掲載されている⁷⁹。

なお、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、北マケドニア、コソヴォでは二〇〇〇年代に認可された教科書が流通しており、他の旧ユーゴスラヴィア諸国と比較することは難しいが、戦争記念碑はほとんど登場しない。ボスニア・ヘルツェゴヴィナのギムナジウム四年生向け教科書にはティエンティシユテ、テトヴォ（北マケドニア）、クラグイエヴァツの記念碑・慰霊碑の写真を並べて「ユーゴスラヴィアにおける第二次世界大戦の記念碑の分析」を課題としているものもあり⁸⁰、小学校九年生向けの教科書にはヤセノヴァツやコザラの記念碑・慰霊碑を掲載しているものもある⁸¹。北マケドニアのギムナジウム三年生向け教科書（北マケドニアでは第二次世界大戦の終戦までが三年生向けの学習内容となつて

いる)には第二次世界大戦に関連するスコピエ、ペーチ(コソヴォ)、ミトロヴィツァ(コソヴォ)の記念碑・慰霊碑が掲載されている⁸²。いずれも、クロアチアのように「記憶の文化」と関連づけたり、記念碑そのものの意義を解説する形にはなっていない。

むすびにかえて

本稿で確認した通り、クロアチアのギムナジウム四年生向け歴史教科書には「記憶の文化」に関する解説が盛り込まれ、戦争記念碑についても、ただ歴史上の事件を説明する際の図版として提示されるだけでなく、記念碑そのものの来歴や意義を学ぶことができるようになった。また教科書によるばらつきが大きいものの、より体系的に「記憶の文化」について学び、その一要素として戦争記念碑を取り上げることが、有意義であるように思われる。もともと、ユーゴスラヴィア時代の「記憶の文化」を社会主義政権による押しつけとして批判的に描く一方、クロアチアにとって独立戦争でもあった「祖国戦争」の意義を強調し、犠牲者・被害者としてのクロアチアと加害者としてのセルビアを対比する手法は、クロアチア側にも犯罪行為があったとする記述も付け加えられているとはいえず、一九九〇年代から本質的に変わっていないといえる。現在の教科書でも第二次世界大戦が軽視されているわけではなく、むしろホロコーストを含む戦争の悲惨さを伝えようとしていることも事実であるが、それが自明のように「人民解放闘争」や社会主義革命と結びつけられるこ

とはなくなり、かつては小・中学校の「自然と社会」や「歴史」の教科書・教材には数多く掲載されていた第二次世界大戦(あるいは「人民解放闘争」)に関する記念碑等も、その多くが抹消され、「祖国戦争」に関する記念碑に置き換えられる形となっている。そうした歴史政策あるいは記憶政策の問題点に触れている教科書もあるが、現在のカリキュラムの下では、まったく異なるタイプの教科書が認可されることは難しいように思われる。

他の旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書を見ると、とくにセルビアでは依然として第二次世界大戦に関する記念碑が比較的頻繁に登場する傾向にあるが、「記憶の文化」の一要素として体系的に学ぶわけではなく、その学習上の意義・効果は専ら教師に委ねられることになると思われる。もともと、各国で新しいカリキュラムへの移行が行われる中、クロアチアと同じように「記憶の文化」を学習内容に加える国々も出てくるかも知れない。また、その際には「記憶の文化」をめぐる新たな論争が旧ユーゴスラヴィア諸国の間で生じる可能性もある。そうした意味でも、今後も継続的にこの問題に取り組んでいく必要がある。

注

1 記念碑にあたるクロアチア語やセルビア語は *spomenik* (スボメニク) であるが、実際には何らかの事件と結びついた記念碑はもとより、王侯貴族や政治家・文化人の功績を称える銅像も戦争の犠牲者を追悼する慰霊碑なども、すべて *spomenik* と呼ばれるが、本稿では適宜訳語を使い分けている。また、本

稿では記念銘板（クロアチア語やセルビア語では「spomen-ploča」）や記念施設も対象とする。

- 2 一九七〇年代に刊行されたビオニールに関するモノグラフには、彼らの「遠征」先として、ヴァリエヴォ（セルビア）のフィリポヴィチ像やヤセノヴァツ（クロアチア）の「石の花」をはじめとする数多くの「人民解放闘争」に関する記念碑や関連施設の写真が掲載されている。Miroslav Jeftović, Rada Prelić, Arsen Dikić, *Pioniri Jugoslavije*, Beograd: Mladost, 1972. なお、社会主義期のユーゴスラヴィアにおいては、ビオニールは「人民解放闘争」における少年兵の記憶と結びつけられ、小学校一年生の「共和国の日」（二月二十九日）にすべての児童が入団するものとされていた。Zlatko Muhvić, ed., *Naša osnovna škola. Odgojno-obrazovna struktura, 2, neizmijenjeno izdanje*, Zagreb: Školska knjiga, 1974, pp.330-331.

- 3 二〇一九年に導入された新たな「歴史」カリキュラム（Kurikulum za nastavni predmet Povijest za osnovne škole i gimnazije u Republici Hrvatskoj, *Narodne novine*, 27/2019）において「二〇・二一世紀の芸術と文化」芸術と個人崇拜、抵抗の芸術や「二〇・二一世紀の記憶の文化、文化遺産の保護機関の役割」といった内容が明記されており、多くの場合、実際の教科書にも反映されている。現在、ギムナジウム四年生向け歴史教科書は四社・四種類が認可されており（Tomislav Anić, Petar Bagarić, Nikica Barić, Ivan Brigović, Stipe Ledić, Tihana Magaš, Ante Nazor, Ivan Samardžija, *Povijest 4. Udžbenik iz povijesti za četvrti razred gimnazije*, Zagreb: Alfa, 2021; Jakša Raguž, Dino Stranić, Hrvoje Petrić, Tomislav Brandolica, Nikola Cik, Hrvoje Gračanin, Suzana Pešorda, Ivana Štimac, *Švijet prije nas. Povijest 4. Udžbenički komplet za povijest u četvrtom razredu gimnazije*, Samobor: Meridijani, 2021; Milijenko Hajdarović, Vedran Ristić, Nikica Torbica, *Zašto je povijest važna? Udžbenik povijesti za četvrti razred gimnazije*, Zagreb: Profil Klett, 2021;

Krešimir Erdelja, Igor Stojaković, *Tragovi 4. Udžbenik povijesti u četvrtom razredu gimnazije*, Zagreb: Školska knjiga, 2021）⁷、独自の章を立てるか否かは別にしてい

何らかの形で「記憶の文化」を取り上げている。

- 4 すべての旧ユーゴスラヴィア諸国において第二次世界大戦に関連する記念碑が数多くつくられていることでは共通している。しかし、バルカン戦争と第一次世界大戦で大きな犠牲を払いながらも戦勝国となり、ユーゴスラヴィアの建国を実現したセルビアでは、これらの戦争に関連する記念碑も首都ベオグラードのカレメグダン公園にある「勝利の像」や郊外のアヴァラ山にある「無名の英雄の記念碑」など全国各地に数多く存在する一方、バルカン戦争とはほぼ無関係で、第一次世界大戦にはオーストリア・ハンガリー帝国の一員として参戦したクロアチアでは、これらの戦争に関する記念碑はザグレブのミロゴイ墓地にある慰霊碑など非常に限定的にしか存在しない。

- 5 旧ユーゴスラヴィア諸国においては、Tihomir Cipek, Olivera Milosavljević, eds., *Kultura sjećanja. 1918. Povijesni lomovi i svladavanje prošlosti*, Zagreb: Disput, 2007; Sulejman Bosto, Tihomir Cipek, Olivera Milosavljević, eds., *Kultura sjećanja. 1941. Povijesni lomovi i svladavanje prošlosti*, Zagreb: Disput, 2008; Sulejman Bosto, Tihomir Cipek, eds., *Kultura sjećanja. 1945. Povijesni lomovi i svladavanje prošlosti*, Zagreb: Disput, 2009; Tihomir Cipek, ed., *Kultura sjećanja. 1991. Povijesni lomovi i svladavanje prošlosti*, Zagreb: Disput, 2011 などの共同研究成果があらわれている。
- 6 門間卓也「ヤセノヴァツ追悼式典を巡る「犠牲の記憶」——ナシヨナリズムと「反ファシズム」の政治潮流に注目して——」『ロシア・ユーラシアの社会』一〇四八号、二〇二〇年、二二—三九頁、木戸泉「クロアチア紛争後のコメモレーションによるナショナル・アイデンティティの強化と継承」『E-journal GEO』一五（一）、二〇二〇年、七四—一〇〇頁など。

- 7 Friedrich Achleitner, *A Flower for the Dead. The Memorials of Bogdan Bogdanović*,

- Zurich: Park Books, 2013; Jonathan 'Jonk' Jimenez, *Spomeniks*, Carpet Bombing Culture, 2018; Vladimir Kulić, ed., *Bogdanovic by Bogdanovic: Yugoslav Memorials through the Eyes of their Architect*, New York: The Museum of Modern Art, 2018; Donald Niebyl, *Spomenik Monument Database*, London: FUEL, 2018. 最後の文献は、ドナルド・ニービル『スポメニック 旧ユーゴスラヴィアの巨大建造物』(グラフィック社、二〇二〇年)として翻訳されている。オリジナルはWEB上のサイト Spomenik Database [https://www.spomenikdatabase.org/] であり、英語版のみだが文献より多くの情報を含んでいる。
- 8 Dušan Korać, *Spomenici i spomen-ploče u čast učesnika i događaja NOB na području Zagreba*, Zagreb: Muzeji grada Zagreba, 1958. この文献の表紙を飾るのは、一九五四年にザグレブ中心部で初めて設置されたフラン・クルスニチによる社会主義リアリズムの彫刻「ファシズムの犠牲者の記念碑」(「人質の処刑」としても知られる)である。
- 9 一九八四年に刊行されたユーゴスラヴィア国内の博物館・美術館等のリスト (Branka Šulc, "Adresar muzeja i galerija Jugoslavije," *Informatica museologica*, Vol.15, No.1-3, 1984) によれば、クロアチアのクラピナ、ザグレブ (ヴィス・コンチャレヴ・クライ、ルコヴドルに分館あり)、スプリト、スラヴォンスキ・ブロード、マカルスカ、リエカ、スロヴェニアのスロヴェニ・グラデツ、ツェリエ、トルボヴリエ、マリボル、セルビアのベオグラード、ノヴィ・サド、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのサライエヴォに独立した革命博物館または「人民解放闘争」博物館があった。一九八〇年に刊行されたスロヴェニアの博物館・美術館案内 (Vesna Bučić, Hanka Štular, eds., *Museums and Galleries in Slovenia, Ljubljana: Društvo muzealcev Slovenije*, 1980) には、リュブリャナのスロヴェニア人民革命博物館のほか、スロヴェニア国内三〇か所以上の革命博物館または「人民解放闘争」関連施設が掲載されている。
- 10 Miloš Bajić, ed., *Spomenici revoluciji: Jugoslavija*. Beograd: SUBNOR Jugoslavije, Sarajevo: Svjetlost, 1968; Drago Zdunić, ed., *Revolucionarno kiparstvo*. Zagreb: Spektar, 1977; *Jugoslavija. Spomenici revolucije. Turistička karta*, Beograd: Turistička štampa, 1986. 『ユーゴスラヴィア革命記念碑・旅行道路地図』には全国で五〇か所の記念碑・記念館が図版とともに掲載されており、その一部には詳しい解説がある。
- 11 ドナルド・ニービル『スポメニック』五頁。
- 12 Juraj Hrženjak, ed., *Rušenje anti-fašističkih spomenika u Hrvatskoj 1990-2000*. Zagreb: SABA RH, 2002, p.XII.
- 13 一九四一年七月二七日に起こったクロアチアで最初の「人民蜂起」の記念碑は第二次世界大戦後、最も早い時期につくられたものの一つであり、一九五〇年代末に刊行された修学旅行案内にも写真とともに言及されている。Velimir Doročević, *Školske ekskurzije po Jugoslaviji*, Zagreb: Školska knjiga, 1959, p.68. なおこの七月二七日は社会主義期には「クロアチア人民蜂起記念日」とされていたが、一九九一年に廃止されて六月二二日の「反ファシスト闘争の日」(シサクでバルザン部隊が結成された日)に置き換えられた。
- 14 Zakon o Hrvatskom povijesnom muzeju, *Narodne novine*, br.27/1991.
- 15 Sklep o ustanovitvi javnega zavoda 'Muzeji novejšje zgodovine', *Uradni list Republike Slovenije*, št.28/1994. 旧ユーゴスラヴィア諸国における「人民解放闘争」に因んだ博物館・記念館等の歴史と現状については、Nataša Jagdnhn, *Post-Yugoslav Memorials: Reframing Second World War Heritage in Postconflict Croatia, Bosnia and Herzegovina, and Serbia*, Palgrave Macmillan, 2022 が詳しい。
- 16 Krešimir Erdelja et al., *Trgovci 4*, p.311. ユゴヴァルの「祖国戦争」関連施設について、Stjepan Bekavac, Davor Marijan, *Vukovar: vodič po memorijalnim mjestima*, Zagreb: Despot Infnitus, 2014. など参考文献も少なくない。

- 17 Slavoljub Cvetković, Dordé Grubač, Branslava Kovačević, *Istorija sa osnovama socijalističkog samoupravljanja za VIII razred osnovne škole*, četvrto izdanje, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 1987.
- 18 Dordé Knežević, Zoran Perić, Bogdan Smiljević, *Istorija sa elementima istorijskog atlasa za drugi razred usmerenog obrazovanja*, šesto izdanje, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 1987.
- 19 Velimir Dorofejev, Ivo Mažuran, Ivan de Zan, *Atlas prirode i društva za III i IV razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1985, p.30.
- 20 JUSP Jasenovac [https://jusp-jasenovac.hr/], ヤセノヴァツの慰霊碑「石の花」落成直後のパンフレットとして、*Jasenovac, Sisak: Jedinstvo*, 1966 がある。ヤセノヴァツ強制収容所に関しては、非常に多くの証言や研究文献があるが、犠牲者数を含めて、必ずしも実態が十分に解明されているとはいえない。門間卓也「ヤセノヴァツ追悼式典を巡る「犠牲の記憶」」等を参照。
- 21 ステイエバン・フィリポヴィチはユーゴスラヴィア共産党員として「人民解放闘争」に参加し、一九四二年に逮捕され占領軍により公開処刑となり、のちに「人民英雄」とされた人物。処刑直前、彼が両腕を振り上げ、人々にファシズムに対する抵抗を呼びかける写真が広まり、抵抗のシンボルとなった。高さ一六メートルもの巨大な銅像は一九八〇年代のクロアチアの小学校八年生向け歴史教科書の表紙にも掲載されている。Rene Lovrenčić, Ivo Jelić, Radovan Vukadinović, Dušan Bilandžić, *Čovjek u svom vremenu 4. Udžbenik povijesti za VIII. razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1987. 現在のクロアチアの小学校・中学校向け歴史教本（教員向け）においてもフィリポヴィチの紹介が有名な写真とともに掲載されている。Nikica Barić, Ivan Dukić, Krešimir Erdelja, Klaudija Gašpar, Miljenko Hajdarović, Daniel Rafaelić, Igor Stojaković, Mladen Tota, Josipa Valentić, *Drugi svjetski rat. Čitanka priručnik za učitelje povijesti u osnovnim školama i nastavne povijesti u srednjim školama*, Zagreb: Školska knjiga, 2016, p.56.
- 22 Jovan Ilić, Milan Danilović, Milan Savić, *Moj prvi atlas za učenike II, III i IV razreda osnovne škole*, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 1986, p.50
- 23 Biljana Danilović, Dragan Danilović, *Poznavanje društva za 4. razred osnovne škole*, Novi Sad: Zavod za izdavanje udžbenika, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 1988, pp.96-117. 七月四日博物館は一九四一年七月にユーゴスラヴィア共産党中央委員会が人民蜂起を決定した建物、ストリツェ博物館は同年九月にユーゴスラヴィア人民解放運動の幹部会合が開催された建物を博物館としたものであり、カディニャチャの記念施設は同年一月にバルチザン労働者大隊がドイツ軍に対して激しい抵抗（カディニャチャの戦い）を行った場所に造成された記念館を含む複合施設。
- 24 Biljana Danilović, Dragan Danilović, *Poznavanje društva za 4. pp.94-95, 123-125.*
- 25 Zlatko Muhvić, ed., *Naša osnovna škola*, pp.111-132.
- 26 Zlatko Muhvić, ed., *Naša osnovna škola*, p.129.
- 27 Ivan Flanjak, Ivan Kampuš, Igor Karaman, *Zagreb i okolni krajevi. Priručnik za učenike*, IX, dopunjeno izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1987, pp.25, 31, 61, 63, 81.
- 28 ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国において「英雄都市」の称号を与えられたのはベオグラード、ザグレブ、リュブリャナ、ノヴィ・サド、ティトヴ・ドルヴァル、プリシュティナ、ツェティニエ、ブリレブの八都市であった。
- 29 注 8 を参照。
- 30 Kamilo Biščan, Milan Cerovac, Ivo Flajšman, Božo Jakovljević, Vladimir Mance, *Rijeka, Istarsko-kvarnersko-goranski kraj. Priručnik za učenike*, VII, dopunjeno izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1986, pp.41-47.

- 31 Antun Giron, Petar Strčić, *NOB i socijalistička revolucija. Čitanka iz zavičajne povijesti Rijeke i riječkog područja*, Zagreb: Školska knjiga, 1975.
- 32 Stelio Baranović, Vlado Horvat, Ivana Iskra-Janošić, Višnja Plemić, Nada Rok, *Vukovar, Vinkovci, Županja. Priručnik za učenike*, VI, dopunjeno izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1984, pp.27-33, 40-47, 52-56.
- 33 Brana Majski, *Spomenici revolucionarnog radničkog i narodnooslobodilačkog pokreta općine Vukovar*, Vukovar: Skupština općine Vukovar i dr., 1985.
- 34 Britt Baillie, "The Dudik Memorial Complex: Commemoration and Changing Regimes in the Contested City of Vukovar," Marie Louise Stig Sørensen, Dacia Vrejo-Rose, Paola Filippucci, eds. *Memorials in the Aftermath of Armed Conflict. From History to Heritage*, Palgrave Macmillan, 2019, p.194.
- 35 一九九〇年制定のクロアチア共和国憲法では「基礎自治体はオプチナ「郡（コタル）」市の三種類に分かれていたが、実際には郡はセルビア人マイノリティ向けの二つの自治区（グリナ郡とクニン郡）にしか適用されず、「祖国戦争」の終結とともにこれらの自治区が消滅した（このとき、二〇〇〇年の憲法修正により基礎自治体はオプチナと市のみになった）。Ustav Republike Hrvatske, *Narodne novine*, br.56/1990; Odluka o proglašenju promjene Ustava Republike Hrvatske, *Narodne novine*, br.113/2000.
- 36 Željko Škalamera, Sonja Gacina-Škalamera, Sonja Jurković, Elizabeta Serdar, Roman Šušković Šipanova, Sanja Majer-Bobek, *Grad Zagreb. Priručnik za školu i obitelji*, Zagreb: Školska knjiga, 2010, p.68.
- 37 Vesna Marjanović, *Korak u svijet grada Zagreba. Županijska slikovnica s integriranim nastavnim sadržajima*, Zagreb: Profil, 2008.
- 38 Željka Agreš-Džida, Valentina Borščak, Petra Pejić Papak, *Primorsko-goranska županija. Zavičajni priručnik za učenice i učenike*, 2. izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 2009, p.39.
- 39 Rosanna Biasiol-Babić, Ivanka Šverko-Blašković, *Istarska županija. Zavičajni priručnik za učenice i učenike*, Zagreb: Školska knjiga, 2010, p.45.
- 40 Deklaracija o Domovinskom ratu, *Narodne novine*, br.102/2000.
- 41 木戸泉「クロアチア紛争後のコメモレーションによるナショナル・アイデンティティの強化と継承」七四頁。「クロアチアは歴史的な背景からナショナル・アイデンティティを強化・継承する必要性があった。そこでさまざまな人々を受け入れ一国民として統合する国民国家であると対外的にはふるまいながら、国内ではナショナル・マイノリティを考慮しない自民族中心の国民国家たる行いが継続されていた。その一つが、ヴコヴァルにおける戦争記憶の一連のコメモレーションである」との指摘がある（同論文、九五頁）。
- 42 Sanja Raoni, *Vukovarsko-srijemska županija. Zavičajni priručnik za treći razred osnovne škole*, Zagreb: Alfa, 2010, pp.27-28.
- 43 Marina Banović, *Korak u svijet Vukovarsko-Srijemske županije. Županijska slikovnica s integriranim nastavnim sadržajima*, Zagreb: Profil, 2008, pp.41, 49.
- 44 Tamara Kisovar Ivanda, Alena Letina, Zdenko Braičić, *Istrazujemo naš svijet 4. Učbenik prirode i društva u četvrtom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2021, p.159.
- 45 Keršimir Erdelja, Igor Stojaković, *Klio 8. Učbenik povijesti u osmom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2021.
- 46 Dinko Benčić, Tvrtko Božić, Lijana Host, Dragan Malnar, Helena Miljević Pavić, Ivo Petričević, *Moja povijest 8. Učbenik iz povijesti za 8. razred osnovne škole*, Zagreb: Alka script, 2021.
- 47 Tomislav Anić et al., *Povijest 4*, pp.322-326.
- 48 Tomislav Anić et al., *Povijest 4*, p.324.

- 49 Tomislav Amić et al., *Povijest 4*, p.324.
- 50 Tomislav Amić et al., *Povijest 4*, pp.115, 118.
- 51 Tomislav Amić et al., *Povijest 4*, pp.130, 139, 141, 147.
- 52 Tomislav Amić et al., *Povijest 4*, p.319.
- 53 Jakša Raguž et al., *Swijet prije nas. Povijest 4*, pp.372-383.
- 54 Jakša Raguž et al., *Swijet prije nas. Povijest 4*, p.372.
- 55 Jakša Raguž et al., *Swijet prije nas. Povijest 4*, p.379-381.
- 56 Jakša Raguž et al., *Swijet prije nas. Povijest 4*, pp.131, 207, 219. トロクトーは一九九一年一〇月末に始まった西スラヴォニアにおける「ハリケーン作戦」のセルビア人側の拠点となったホテルの名称。イヴァノヴォ・セロは同じく西スラヴォニアに位置するチェコ人の集落で、一九九一年九月にユーゴスラヴィア人民軍・セルビア人側の攻撃を受けて多くの犠牲者を出した。
- 57 Mijenko Hajdarović et al., *Zašto je povijest važna ?*, pp.341-345.
- 58 Mijenko Hajdarović et al., *Zašto je povijest važna ?*, p.343.
- 59 Mijenko Hajdarović et al., *Zašto je povijest važna ?*, p.344.
- 60 Mijenko Hajdarović et al., *Zašto je povijest važna ?*, p.345.
- 61 Mijenko Hajdarović et al., *Zašto je povijest važna ?*, p.339.
- 62 Mijenko Hajdarović et al., *Zašto je povijest važna ?*, pp.169, 252-253.
- 63 Krešimir Erdelja et al., *Tragovi 4*, pp.311-313.
- 64 Krešimir Erdelja et al., *Tragovi 4*, pp.171-173, 177. 例えば「南京大虐殺」に関しては、慰霊碑の解説文で「一九三七年二月からの六週間で、日本の占領軍は強奪や強姦に加えて軍人・民間人を問わず二〇万人以上の中国人を殺害した。この事件は現在でも日本と中国の関係の重荷となっている」とされ、一次史料（証言）も添付されている。本文中でも「日本軍の捕虜を恥として虐待を厭わない精神性の問題や軍人・民間人を問わずに厳しく対処する占領統治の残忍さ
- に關する詳しい記述がある。 Krešimir Erdelja et al., *Tragovi 4*, p.171.
- 65 Krešimir Erdelja et al., *Tragovi 4*, pp.278, 290, 301. ヘルルフ・ゼレンは「クロアチア空軍で最も有名なパイロットで、祖国戦争の英雄の一人」として紹介されている。 Krešimir Erdelja et al., *Tragovi 4*, p.301.
- 66 ヨシブ・ヨヴァチは「一九九一年の復活祭での祖国戦争の最初のクロアチア人犠牲者」として紹介されている。 Krešimir Erdelja et al., *Tragovi 4*, p.305.
- 67 Krešimir Erdelja et al., *Tragovi 4*, pp.305, 307.
- 68 Nikica Barić, Darko Dovrančić, Tamara Janković, Anje Nazor, Domagoj Novosel, Emil Petroci, *Domovinski rat. Čitanka priručnik za učitelje povijesti u osnovnim školama i nastavnike povijesti u srednjim školama*, Zagreb: Školska knjiga, 2015.
- 69 Duško Lopandić, Ratimir Milkčić, Manja Milinković, *Istorija. Učbenik sa odabranim istorijskim izvorima za četvrti razred gimnazije opšteg tipa društveno-jezičkog smjera*, Beograd: Novi Logos, 2021, pp.95, 118, 121.
- 70 Duško Lopandić et al., *Istorija*, p.172.
- 71 Aleksandar Todosijević, Sanja Petrović Todosijević, *Istorija 8. Učbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Klett, 2021, pp.112-113, 117, 124, 128.
- 72 Aleksandar Todosijević et al. *Istorija 8*, pp.98-99, 134.
- 73 Aleksandar Todosijević et al. *Istorija 8*, p.222.
- 74 ヴルカン・スナニエ社の教科書（表紙画像にヤセノヴァツの「石の花」が含まれる）にはクラグイエヴァツ、ノヴィ・サド、ヤセノヴァツの記念碑・慰霊碑（Vesna Dimitrijević, *Istorija: učbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Vulkan znanje, 2021, pp.112, 132-133）・エムッカ社の教科書にはヤセノヴァツ、クラグイエヴァツ、カディニャチャ、コザラ、ティエンティシユテ、シサクの記念碑・慰霊碑（Milica Omrčen, Nevena Grbović,

- Istorija: udžbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Eduka, 2021, pp.120, 124-125, 128, 131, 138) 教科書局の教科書(表紙画像にティエンティシュテの記念碑が含まれる)にはクラグイエヴァツ、カディニャチャ、ティエンティシュテの記念碑・慰霊碑 (Dragomir Bondžić, Kosta Nikolić, *Istorija: udžbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Zavod za udžbenike, 2021, pp.110, 112, 118) ネルンディウム社の教科書にはクラグイエヴァツ、ヤセノヴァツ、ノヴァ・サド、ヤブカ(ブリエホポリエ)の記念碑・慰霊碑 (Predrag M. Vajagić, Aleksandar Rastović, Bojana Lazarević, *Istorija: udžbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Gerundijum, 2021, pp.143, 158, 160) ータ・スタトゥス社の教科書にはブバニ(ニシユ)・クラグイエヴァツ、カディニャチャ、ブラニャニ(コルニ・ミラノヴァン)、ヤセノヴァツ、サイニシュテの記念碑・慰霊碑 (Dragana Hadžić, Marko Stanojević, *Istorija: udžbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Data Status, 2021, pp.107, 118, 121, 132, 138, 140) ノヴィ・ロボス社の教科書にはクラグイエヴァツ、ヤインツィ、シンド、ティエンティシュテ、サイニシュテ、ヤセノヴァツ、ノヴァ・サド、ベオグラードの記念碑・慰霊碑 (Ratomir Miličić, Ivana Petrović, *Istorija: udžbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Novi Logos, 2021, pp.137, 141, 146, 153, 157, 159-160) BIGZ社の教科書(表紙画像にクラグイエヴァツの慰霊碑が含まれる)にはヤセノヴァツ、クラグイエヴァツ、ヤドヴノ、ノヴィ・サンの記念碑・慰霊碑 (Uroš Miliivojević, Zoran Pavlović, Vesna Lučić, *Istorija: udžbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: BIGZ, 2021, pp.111, 149, 159-160, 162, 168) フレスカ社の教科書にはベオグラード、シンド、サイニシュテ、ノヴァ・サドの記念碑・慰霊碑 (Ljubodrag Dimić, Lijana Raković, *Istorija: udžbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Freska, 2021, pp.128, 151, 156-157) が掲載されている。
- 75 フレスカ社の教科書にはクラグイエヴァツの記念碑・慰霊碑 (Radoš Ljusić, Ljubodrag Dimić, *Istorija za treći razred gimnazije prirodno-matematičkog smera i četvrti razred gimnazije opšteg i društveno-jezičkog smera*, Beograd: Freska, 2013, p.200) クレット社の教科書にはノヴィ・サンの記念碑(慰霊碑) (Mira Radojević, *Istorija za treći razred gimnazije prirodno-matematičkog smera, četvrti razred gimnazije društveno-jezičkog smera i opšteg tipa i četvrti razred srednje stručne škole za obrazovne profile pravni tehničar birotehničar*, Beograd: Klett, 2014, p.316) が掲載されているが、教科書局の教科書 (Dorde Đurić, Momčilo Pavlović, *Istorija za treći razred gimnazije prirodno-matematičkog smera i četvrti razred gimnazije opšteg i društveno-jezičkog smera*, Beograd: Zavod za udžbenike, 2010) にはヤヤノヴァン強制収容所の当時の写真などが掲載されている。
- 76 Šerbo Rastoder, Dragutin Papović, Sait Šabočić, *Istorija 4 za četvrti razred gimnazije*, Podgorica: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 2009, pp.152, 157, 169, 220-221.
- 77 Slavko Burzanović, Jasmina Dordević, *Istorija. Udžbenik za deveti razred osnovne škole*, Podgorica: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 2018, pp.94, 96.
- 78 Aleš Gabrić, Maja Režek, *Zgodovina 4. Učbenik za četrti letnik gimnazije*, Ljubljana: DZS, 2012; Maja Režek, Gregor Antolčić, Špela Frantar, Gordana Popović Lozar, *Zgodovina 4. Sodobnost. Učebnik za zgodovino v 4. letniku gimnazij*, Ljubljana: Mladinska knjiga, 2022.
- 79 Maja Režek et al., *Zgodovina 4*, pp.148, 154.
- 80 Zijad Šehić, Aida Kovačević, Alma Leka, *Historija 4. Udžbenik sa historijskom čitankom za četvrti razred gimnazije*, Sarajevo: Sarajevo Publishing, 2007, p.185.

¹⁸ Izet Šabotić, Mirza Čehajić, *Historija. Učbenik za deveti razred devetogodišnje osnovne škole*, Tuzla: NAM, Zenica: Vrijeme, 2012, pp.155, 159.

²² Blaže Ristovski, Šukri Rahimi, Simo Mladenovski, Todor Čepreganov, Stojan Kiselinovski, *Istorija za treća godina gimnazijsko obrazovanje*, Skopje: Albi, 2011, pp.111, 161.